
翡翠と少女達 ~遠く離れた世界で~

Akatuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠と少女達 ～遠く離れた世界～

【NZード】

NZ8232NZ

【作者名】

Akatsuki

【あらすじ】

一つの物語の変化が、少年に時を、世界を越えさせる。その瞳で少年はどのような世界を映すのだろうか・・・・・。

なのはGORAアフターライフ物+独自設定+「」都合主義です。

第0話（前書き）

試験的な意味でも、本格的に頑張る意味でも上げてみます。

とりあえず注意点を、

・作者は説明が苦手です。彼女達をしつかり説明出来るか不安です。

・矛盾も生じるかと思われます。

・キャラのイメージを壊してしまいかかもしれません。

・あの世界に関しては想像（妄想）して書きます。

・駄文注意報

とりあえずプロローグです。
では、どうぞ。

とある少年が言った、こんな言葉がある。

――世界はこんなはずじゃなかつた事ばっかりだ。

身体に走る激痛によつて震む意識を強制的に覚醒させられる中、少年は壁に身体預けた体勢——いつでも動けるように——でその言葉を思い出していた。

「・・・・全くだよ。クロノ」

少年はその言葉を一人の女性に言い放つた悪友の名前を呟く。

誰もが人の不幸などを知つた時、意識的にでも無意識的にでも思うことであらう。

まさか、自分はそんなことにならないだらう。ヒ。

だが、その考え方間違いだ。

不幸も幸福も差はあれど差別無く人々に降り懸かる。その不幸が今、自分に降り懸かっているんだと少年は冷えた思考の片隅で結論づける。

「・・・・・」

少年は極力息を潜める。

見つかるわけにはいかない。

なぜなら、死にたくないから。 友人達を悲しませたくないから。

悲痛に顔を歪めた彼女に笑つて欲しいから。

だが少年の思いとは裏腹に、現実は非情だった。

――。

視界の端に、赤い点が浮かんでいるのに少年は一瞬遅れて気がついた。

すぐさま逃げ出そうとするが体に力が入らず、足を躊躇させて倒れてしまった。

（逃げ・・・・・ない・・・と）

頭ではそう考へても、体が動かなければどうしようもない。スウーッと「奴ら」が近づいて来るのが感じられる。

（何とか、何とかしないとつ）

少年が必死に頭を働かせる。

この絶望的な、死が目前に迫っている状況を打破する方法を見出だすために。

最期まで、最期まで諦める訳にはいかない。

この身にも、不屈の心はあるのだから。

――。――。

少年の視界の外では、ついに「奴ら」が少年の場所へ辿り着き、腕らしき場所に備わっている刃を上に振り上げる。

そして「奴ら」が刃を振り下ろそうとした――次の瞬間、

――。――。

突如耳に響く轟音が周囲に響き渡り、床が崩壊し、少年と「奴ら」

は諸とも下へと落下していった。

少年が気がつくと、辺りは漆黒の闇に覆われ、視界が全く意味を成さなかつた。

「……ひとまず、助かつたかな」

状況が好転した訳では無いが、眼前に在つた死神から逃れられた事に安堵の声を漏らす。

「……ああでも、傷開いたなあ

まるで人事の様に呟く。

止血等の応急処置はしたが、元が重傷のため焼け石に水の状態であつたのだ。

なげなしの魔力を傷口の治癒に回しながら、分割した思考の中でこれからすべき事を模索する。

——キインツ！

「……ん？」

すると、何処からか少年の耳に金を引っ搔く様な高音が届いた。最初は小さな音だったが、徐々に大きな音に変化していき、最終的には頭を搔き乱す様な不快な音と為つた。

「……つ！あぐうつ……」

少年に激しい頭痛が襲い掛かり、思考がバラバラに分解される。それが原因で塞がりかけていた傷口が再び開き流血を始める。

「・・・・・・つ！？」

少年の意識が闇に沈みこもうとした瞬間、少年の瞳にある風景が写り始めた。

――そこは病に犯された故郷の星を、人々と機械達が協力して元の縁豊かな姿に戻すために日々努力している世界。その世界に人々と共に笑顔を浮かべている六人の少女の姿があつた。

少年の視界が元の暗闇の世界を写す。

それと同時に離れた場所からまばゆい極光が生まれ、暗黒の世界を、少年を間もなく飲み込む。

数秒経ち、光が收まると元の漆黒がそこにあつた。

だが何処にも、確かに存在していたはずの少年の姿がなかつた。

第〇話（後書き）

これから頑張っていきます。

御指摘等はお気軽に。

では、次話でお会いしましょう。失礼します。

第一話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

まだまだ話は進みません。

一先ず、最初の主なメイン達が登場します。

それでは、どうぞ。

青空の下、道行く人達と元気に挨拶の言葉を交わしながら、少女は自身の家族が待つ家への帰路を歩いていく。
今日も少女は出没した危険生物をスバッと退治し、気分爽快と上機嫌な様子だ。

そして自宅が視界に映ると、足取り軽やかに走りはじめ、その勢いのままドアを蹴破る。

「シユテるんたつだいま～！」

「はい、お帰りなさいレビイ。言つまでもありますんが、ドアは自分で直しておいてください」

家中にいた少女、名をシユテルが無表情のまま帰ってきた少女、名をレビイを迎える。
レビイの行動をしつかり釘刺す辺りは、もつ活動的な彼女の行動には慣れっこなようだ。

「怪我はしていませんね」

「あつたり前じやん。あんな奴なんか僕にかかるばノーダメ秒殺大勝利つ！！だもんね！」

「それは何よりです」

大仰にポーズを決めながら説明するレビイの頭をナデナデするシユテル。

レビイは「えへん」と胸を張つて満足そうにする。

「そ、うそ、シユテるん。僕お腹空いたあ」

「そう言つと思って、既に食事の用意は整つています。早く手を洗つてください」

「はーい！」

元気良い返事と共に手を洗いにいくレビイを見届け、シユテルは先に食卓の方へと移動しようと体を方向転換しようとした。そんな時だつた。

「シユテルさん。シユテルさんは居るか？」

未だに蹴破られてそのままの玄関のドアから、息を切らせた男性が入つてきた。

「どうしたのですか。そのようにお急ぎの」様子で。まずは呼吸を整えてください」

「あ、ああ、すまねえ」

言われた男性は深呼吸を数回繰り返し、自身が落ち着いたのを確認して、口を開いた。

「それが広場が突然光つたと思つたら、いきなり人が倒れていてな

「はい」

「どうにも誰もその人の顔を知らなかつたので、顔が利くシユテルさんなら誰か知つているのではないかと」

「事情は承知しました。では、今から参りましょ。その人は今どうしていますか」

「今はリークさんの家で寝かしてゐるよ

「わかりました。レビイ、少し私は出かけます」

シユテルがそう言つと、レヴィは慌てた様子で戻つてくる。

「待つて待つて僕も行く！一人で食べたつて美味しいもん」

「わかりました。では行きましょう」

知らせに来た男性を先頭に、シユテルとレヴィは件の人物の下へと向かつた。

道中、シユテルは先頭を歩く男性、クウジにその人物の特徴を聞いていた。

「その人物の特徴は？」

「ああ、髪は金髪で目は澄んだ翡翠、体格は華奢で顔は女顔の男だ」

「そうですか」

自他ともに顔が広いと認めている自分でも、その様な人物はこの世界では知らない。

と、この世界では。というフレーズの所でシユテルは遠く離れた世界で過去に一度対峙した、ちょうどその特徴が当て嵌まる人物を思い浮かべた。

「・・・・ないとしますが」

「ん？ どつたのシユテるん？」

「いえ、何でもありません」

もし、もしもだ。

今考えた予想が当たつてゐるのなら、驚愕に値する再会だ。とシユテルは思う。

何故なら、そうだとしたらあの世界で時間跳躍の方法が見つかって
たという事になるからだ。

まあもう他に考えられる事態として、厄介な事に巻き込まれたか、
事故によってなどが考えられるが。

「シユテるん着いたよ！」

レヴィが大きな声で叫ぶ。

思考の海に漂っている間に目的地に着いていたようだ。

「どうこう事にせよ、会えば分かる事です」

特別危険な事ではないでしょ？ どちらかと言えば不思議な事態ですから。とシユテル一旦思考するのを放棄する。
ここで一人を案内したクウジは自分の仕事場へと戻る。
シユテルとレヴィは田の前の家へと入つていった。

「いらっしゃい。シユテルちゃんにレヴィちゃん」

「お邪魔します。リークさん」

「こんちわっす」

一人を出迎えたのは恰幅の良い男性、この集落のまとめ役である
リーク・エクレアだつた。ちなみに妻子持ち。

「それで件の人物はどちらに」

「ああ、こっちの部屋で寝かしてあるよ」

一人はリークの後ろをついていく。そして案内された部屋へと入り、中にあるベッドに寝かされている人物の顔を見た。

「・・・まさか、とは思いましたが

「あれ? どつかで見た気がする」

「お? 見覚えあるのか」

シユテルとレビの反応にリークは安堵の様子を見せる。

「ええ。少し記憶の中の彼と誤差がありますが、私の知り合いで
す。リークさんが懸念している様な人物ではありませんのでご安心
を」

「むむむ・・・・・」

隣で唸りながら彼を思い出さうとしているレビをスルーし、シ
ュテルは寝ている彼に淡々と言ひ。

「お久しぶりです。師匠」

ベッドで寝ているのは、シユテルの姿形のオリジナルである少女
の魔導の師、ユーノ・スクライアであった。

第一話（後書き）

登場人物達はユーノ達以外、アカツキのオリジナルとなっており
ます。

御指摘等はお気軽に。

では、失礼します。

第一話（前書き）

展開が激遅ですが、ご了承ください。
まだキャラ達の口調が安定していません。
では、どうぞ。

第一話

走る、走る。

少年はただ前へと足を動かす。

「・・・はつ、は・・・」

辺りは真っ暗。

前方はほとんど見えず、けれど後ろは決して振り向かずに少年は走りつづける。

少年は逃げつづける。

後ろから迫り来る、「×」から犯されないために。

「・・・・・へつ！」

だが、「×」は徐々に距離を詰めてくる。

少しずつ、少しずつ。

そして、

『オマエハ「×」カラハノガレラレナイ』

そんな片言な声が聞こえた瞬間、少年の意識が暗転した。

「つ……」

少年、ユーノ・スクライアは文字通り跳ね起きた。

そして忙しく視線を周囲に走らせる。

「…………夢、か」

妙にリアルな夢だつたと額に浮き出た汗を拭きながら、力が抜けたようにボスッと体をベッドに預ける。

「…………ちよつと待つて」

誰に言つわけでもないが、少年は咳き、もつ一度視線を周囲に張り巡らせる。

畠に映るのは半分ほど埋まつた本棚と簡素な机、そして自分が寝ていたベッド、自分が今いる部屋。

「…………」

言葉を畠に遊ばせながら、少年は一気に覚醒した頭で思い出す。自分は遺跡内部で死にかけていたはずだ。と。

少年が頭を働かせていると部屋の扉が開き、一人の少女が入ってきた。

「…………起きてる」

「え、えと…………」

少女はポツリと言つと、扉を開け放しのまま音も無く通路を歩いていった。

ユーノが頭の上に?を浮かべていると、今度は男性が部屋に入ってきた。

「よう坊主。畠覚めたか」

「あ、はい。おはよう」やがてます

「おうおはよつ。ん? 何だその顔は?」

「いえ、その、何故自分がここで寝ていたのか皆田検討がつかず」

「まあ、そりやそうだわな」

男性は顎に手を添えて考へる仕種をすると、一先ず、と言葉を添えてから続ける。

「朝飯食いながらでもそこそここの話をするか。ほれ、起きろ」

コーノは朝飯という言葉と同時に腹を鳴らしてしまい、男性に笑われながら、共に食卓へと向かう。

そこには、妙齢の女性と先ほど部屋を覗いてきた少女が既に椅子に座っていた。

上には既に朝食が四人分並べられている。

「ほれ、座れ」

「は、はい」

言われるままに空いていた椅子、少女の隣に座るコーノ。

流れてきているコーノを置いて、男性達は胸の前で手を組んで目を瞑ること数秒の後、食事を始めた。

固まっているコーノも男性の「食べねえのか?」という言葉で食べ始める。

そのまま食事を始めてから少し経つた頃、男性が口を開いた。

「だいたい腹も落ち着いてきたる。俺の名前はリーグ・エクレア。隣の家内がサラサ、お前の隣に座つている娘がミーナだ」

男性、リーグの紹介と共にサラサが小さく会釈し、ミーナはただジッヒとコーノを見詰める。

「それで坊主、名は？」

「え、ああ、僕はユーノ。ユーノ・スクライアです」

「ユーノか。よしユーノ、お前なんだ？」

「なんだ、と言われましても……」

何とも要領を得にくい言葉にユーノが困惑の表情を見せる。実際、ユーノ自身まだ現状を正しく理解出来ていないのだ。

「すまん、聞き方が悪かったな。お前さんな、三日前に広場に突然現れたんだわ。そこで気を失つてたから家に運んだんだが」

「それはご迷惑をおかけしました。…………つて、三日ですか？」

「あう。やけに服とか破けてたが外傷は見当たらなかつたから不思議だつたんだが、まあ大丈夫みたいだな」

今お前さんが着てるのは俺のお古だ。とユーノが着ているやや大きめの寝巻を指差す。

「外傷が見当たらない？」

ユーノがペタペタと自身の体を、主に脇腹辺りを念入りに触れる。その様子にリークは怪訝な顔になつた。

「おいどうした？」

「確かに、脇腹辺りを刺されたり、全身打撲の状態だつたと思うんですけど……それに、自分は遺跡で死にかけていたはずです」

「…………は？」

何言つてんだこいつ。という顔で見るリークだが、ユーノの眞面目な顔を見て事実だと悟る。

「マジか」

「マジです」

話を聞いていたサラサとミーナが目を見開く中、話を進めよつとリークが口を開こうとした瞬間、

「その話、詳しく聞かせて頂きたいですね」

淡々とした声が四人の耳に届いた。リークが声の主へと顔を向ける。

「おお、ちよつと良い時に」

「朝早くからお邪魔いたします。ミーナからの念話で彼が起きたと聞きましたので、参りました」

抑揚の無い声、だが聞き覚えのある声に、ユーノはゆっくりとそちらへと顔を向ける。

そこには、幼なじみに似た少女の姿があった。

そして、ユーノはその少女の事を知っている。

「……シユテル？」

「お久しぶりです。師匠」

そこには、ジーツとユーノを見詰める少女、シユテル・ザ・デストラクターの姿があった。

第一話（後書き）

この次の話でGODで明かされた話等々を説明しようと考えたのですが、試しに書いてみたところゲーム内容を全部書いてしまうところでしたので止めました。

ですから、説明は本当に簡単にしちゃうか、もしくは読む方々がGODをプレイした前提で書いて行こうと思います。

ですから、わかんない箇所がある場合や、こいつ誰?とかいた場合はゲームをプレイしていただくか、ググってWikieるか、「あ、こんなキャラいるんだ」と軽く流すか、もしくはアカツキに質問してください。感想制限は外しておきますので、そこで出来る限りお答えします。

では長くなりましたが、この辺で失礼いたします。

注意、グダグダ。

今日はあともう一つ上げます。
ですので、これの後書きはありません。

「君達は確かアミタさんの故郷に行つたんぢや」

「ええ行きました。一つお伺いしたいのですが、どのような方法で時間跳躍したのでしょうか」

シユテルに問い合わせたユーノは返つてきた質問に首を捻る。

時間跳躍とはどういう事なのだろうか。自分は何らかの力が働いて飛ばされただけだと思うのだけれど・・・・。と。

そんな様子のユーノを見たシユテルはポンと手を打つた。

「そういえば、記憶封鎖が掛けられているのでした」

シユテルはユーノへと近づき、彼の額に手を当て、彼の記憶を解放する。

数秒ボーッとしたユーノだったが、ハツとした顔をする。

「・・・・・シユテル」

「はい」

「ここ、アミタさん達の故郷のエルトリアなのかな」

「そうです」

ユーノはシユテルの返答に体を硬直させる。

顔の前で手を振つても反応を示さないので、シユテルは?を浮かべているワーカー一家に言つ。

「先に食事を済ませた方がよろしいかと思われます」

その言葉にとつあえず頷いた三人は、止めていた食事の手を動かし始めた。

皿を下げる後、今度はユーノの隣にシユテル、テーブルを挟んで向かいにエクレア一家が座る形となっていた。

「それでは師匠、先ほど言つていた「死にかけていた」という発言の説明をお願いします」

「え、あ、うん」

頭の中で整理が出来たのか落ち着いた様子で話はじめる。

「僕は管理局——司法組織と同義と考えてください——の依頼で数名の学者と護衛と一緒にとある遺跡の調査に行きました。内部は多少の罠などはありましたが、調査は順調に進みました。そして中程にたどり着いた時に、突然アンノウンに襲撃されたんです」「その時、僕は護衛の一人を庇つて刺され……瓦礫で通路が塞がれて皆と分断されてしまつて、そのまま逃げ続けた後床が崩れて下の階に落ちました。それで気がついたらリークさんの家で寝ていました」

ユーノの語りが終わり、リーク達は困惑の表情を浮かべる。それに対して、シユテルははあと溜め息を吐いて言つ。

「護衛される人がする人を庇つてどうするのですか

「・・・いや、うん」

田を逸らすユーノ。そこから辺は自分でも分かつてゐるらしい。

「落下した後は覚えていないのですか？」

「全く覚えてないんだ」

「そうですか」

シユテルはリーケ達の方を向き、何か質問はありますか。と訪ねる。するとリーケが顎を撫でながら口を開いた。

「するとなんだ、シユテルちゃんが知り合いつていう事は、この坊主も嬢ちゃん達と同じつつう事か」

「そうです」

「なるほどなあ

何か前情報があるのかリーケは納得した顔をする。そしてリーケはユーノの方を向いて言つた。

「事情は理解した。とりあえずお前は警戒するような人物じやねえつてこともな

それと、とリーケは言葉を続けた。

「お前が過去から来たつてこともな

「・・・・・はい？」

「いやな、アミタがシユテルちゃん達を連れてきた時に一通りの事情は聞いたんだわ

だから、お前が過去から来たとか言つても驚かねえよ。とリーケは笑いながら言つ。

表情から察するに、サラサとミーナもその辺の話は知っていたようだ。

まあそこからは、特に間も詰まる事無く話が進んでいく。

「まあ。ユーノ君はその若さで考古学者なんですか」

「まだ、端くれですけど」

サラサがユーノの仕事等の話を聞いたり、ユーノが魔法を使える事を知つてミーナが質問したりなど。畏まつた空気は霧散して柔らかな空気の中会話が続いていく。それから時間が過ぎて、今のエルトリアについて話をするのと、もう一人の元気つ娘と合流するために、ユーノはシユテルとリークと共に外へ出た。

「実際、シユテルちゃん達が来てくれて助かつたぜ」

と、歩きながら語るリーク。

ユーノとシユテルは間にリークを挟む形で並んで話を聞いていた。

「博士の研究とアミタ達、ギアーズのおかげで燈つた小さな希望の光を、嬢ちゃん達がさらに大きくしてくれたんだからよ」

死蝕という現象によつて徐々に死へと向かつてゐたエルトリア。大切な故郷で暮らす事と、娘の未来の事を天秤に掛けて悩んでいたとリークは言つ。

「大した事はしていません。ユーリもディアーチェもレヴィも私も」

「そう謙虚になんなつて」

話しながら、リークは自分達の集落を、周囲の縁をユーノへ見せていく。

ユーノの瞳には笑顔で走り回る子供達や、精力的に農作業に勤しむ人達、談笑し合う人達の姿が、そして青々と繁る木々達が映る。

「アミタ達が、嬢ちゃん達が頑張つてくれてるおかげで、俺達は笑顔で今こつして笑顔でいられる訳だ」

そう締め括ると、リークはユーノへと顔を向ける。

「ゴーー、お前魔法が使えるんだよな

「はい、それなりには」

「そんなら今日からお前は嬢ちゃん達と一緒に皆の魔法の先生な。あと、俺の家で面倒見るから。よし決定

「あの、お世話になつていいんですか？」

「遠慮すんな。部屋は空いてるし、逆に聞くが後は嬢ちゃん達のところしかあてが無いだろ」

事実だ。

さりに、シユテル達の家にお邪魔するのは気が引ける。

他に迷う選択肢が無いゴーーは、その提案に甘える事にした。

「・・・・では、お世話になります」

「おう。じゃあ俺は家に戻るわ。シユテルちゃんと話す事話した
ら帰つてきな」

そう言つとリーグは手をひらひら振つて去つていいく。

ゴーーはその背に頭を下げる。

そして、今度はシユテルについて歩きだした。

二人は今、シユテル達が暮らしている家への前にいた。

「どうぞ、上がつてください

「うん。お邪魔します」

扉を開けて中に入ると、「シユテルの嬢ちゃんお帰つ~」といつ声が聞こえ、ひょこつと一人の少女が顔を出した。

「はい、ただ今戻りました」

「うんっ！・・・・む？君は・・・」

「久しぶり、で良いんだよね。レビィ」

「コーノが言つて、レビィはおーーと声を上げて少年を指差した。

「コノコノだ！」

「・・・・ん？」

聞き間違いかな。

コーノは自分の耳を疑つた。

「僕の名前はコーノなんだけど」

「・・・・めんどくせこから、コノコノでいいや

「・・・・」

そういえば、フロイトの事もオリジナルって呼んでたなあ。と思
い出すコーノ。

隣でポツリと呟かれた「レビィはこいつ子ですか」 「こいつ
オロー？」の言葉で、いつかとコーノは考えるのを止めた。

その後、リビングにてシュテルとレビィが並ぶ形で座つて向かい
合つ。

「さて、状況を整理する事に致しましょつ。まず師匠、貴方の世
界ではあの日から何年ほど時が過ぎてありますか」

「一年と少しだね。こつちは？」

「ヒルトリアでは四年程です

「そ、うなんだ」

時の流れの違いに驚くが、そもそも時間も世界も違うのだからと

納得する。

そもそも、ユーノは狙つて時間跳躍した訳ではないのだし。

「ナノハ達は元気にしていますか」

「・・・。・・・うん。元気にしてるよ」

一瞬、ユーノが言葉を詰まらせるが、シユテルは特に気にした様子もなく話を続ける。

「先に伝えておきますが、アミタ達が使用していた時空間移動装置ですが、私たちがこの世界に訪れた際に、その機能を停止させてしました」

「動かない?」

「残念ながら」

少し期待していたユーノだが、動かないのなら仕方ないと諦める。

「そういえば、他のみんなは?」

「ヨーリとディアーチェは、アミタとキリエと共に用事で出掛けています。その間、私とレビイは留守を任せています」

ちなみに、二人が続けて会話しているので暇なのか、レビイはチビチビと暇そうにジュースを飲んでいる。
しばらく話し続けた二人は話を総括する。

「師匠がここにいる原因が分からぬ以上は、時間跳躍に関しては今のところ特に出来る事もありません」

「うん。今の僕に出来る事は、リークさんのお世話になりながら、みんなの手伝いすることだね」

「そうなります。エルトリアの大地が完全に輝きを取り戻すまで

時間も掛かりますし、師匠には遺跡探索等も手伝っていただきたいです

「了解したよ」

とりあえず方針が決まった。

話が一段落した後は、ユーノはシユテルとレビに連れられて、集落の人達に挨拶回りへと行き、暖かい歓迎を受ける事となつた。そしてこの日は二人とは別れ、ユーノはエクレア一家が待つ家へと足を向けた。

文章が上手く繋がっていないと思われた場合は、アカツキの力量がこの程度ということです。

この小説の方針ですが、エルトリアの死蝕に関してはアミタ達が頑張っているという事で、あまり触れない予定です。エルトリアでは日常ぐらいですかね。

さて、これからは時間が飛んだりします。あと日常を書くのですが、予定一覧を下に、

- ・ゴーノとシユテルの魔法教室

- ・ユノユノとレヴィのリリカルハンター・ポータブル
- ・ユノユノとレヴィと不思議なダンジョン
- ・ゴーノとシユテルが×××

となつております。

あくまで予定ですので。

四人は後々合流しますので。

ご指摘、質問等々お気軽に。では、これで失礼します。

×××は、別にいかがわしい事ではありません。一応囁いておきます。

第五話（前書き）

某姫無双でいう拠点ファイズ的なもの。
今回はコーカとシユテルの魔法教室です。
文章が変ではないか少々不安ですが・・・。
それでは、どうぞ。

コーカならこのぐらい出来る飯がしました。

8時40分、こんなに防御はいらないかと思い、プロテクション
を減らしました。

ユーノが目覚めてから数日後、何日か置きにシユテルが開催している、集落で魔力を持つ人対象の魔法教室が開かれていた。

参加人数は十名（内子供が八に大人が二）。

参加人数は毎回このぐらいで一組で、後の組とローテーションで回している。

一度に大人数を教えるよりも、人数を分けてなるべく丁寧に説明したいというシユテル達の方針のためこのようになっている。

教える魔法は初步的な生活内でも使えるものや、中でも進歩が早い者には難易度が高いもの等を教えている（ちなみに、参加者達には簡易デバイスを渡している）。

今からは、ユーノもその先生役へと回ることになっていた。

実際に教えていると、ユーノの物腰や説明の仕方が好感的に捕えられ、子供達から早い段階で親しまれる事となつた。

そこまではいいとしよう。

これまでの事を回想したユーノは、頭に手を当てて空を仰ぎながら言つた。

「…………どうしてこうなつた」

そう言つたユーノから離れた場所には、ルシフェリオンを構え準備万端という様子で彼を見るシユテルが立つていた。

始まりは、一人の男の子が言つた質問だった。

「ユーノ兄ちゃんとシユテル姉ちゃんって、どっちが強いの？」

その質問にピタリと体の動きを止めるユーノ。まさか・・・・・と冷や汗を流しながら答える。

「僕とシュテルは分野が違つけど、どつしが強いかつて言つたら間違いなくシュテルだよ」

何の嘘も交えず、間違つても危惧する事態にならないよう、心からそう告げるユーノだが、子供達はどうも納得した様子を見せてくれない。

「でも、お姉ちゃんがお兄ちゃんの事「師匠」って呼んでるよ。」

別の女の子の言葉に他の子達も頷く。

それはシュテルがそう呼んでるだけだよ。とユーノが説明するが、やはり子供達は不満げだ。

どうやって納得させよつか悩んでいると、シュテルの口から彼にとつて歓迎し難い台詞が出てきてしまった。

「では、簡単な手合せをいたしましょうか」

ルールは簡単。

シュテルが放つた砲撃魔法をユーノが防ぐというものだ。

「ねえ、本当にやらないきやダメかな?」

「子供達の目を見ても、そのような事が言えますか?」

「・・・・・・」

ユーノがチラッと、安全な場所で一人を見学している子供達を見

るど、期待で目をキラキラとさせていた。

とても、やつぱ止めます等とは言えない。

「安心してください。ちゃんと手加減はいたしましたす
「……了解」

ユーノが覚悟を決める（諦めたとも言える）。
シユテルの足元に紅い魔法陣が現れ、構えているルシフューリオン
に魔力が集中していく。

「ブレイカーは無しね
「……………分かっています」
「今の間は何！？」

内心で残念がっているシユテルである。ユーノからしたら冗談では済まない事だが。

「……………参ります」

準備が完了したシユテルはルシフューリオンをユーノに向か、子供達が見守る中自身の最も使い慣れている魔法を解き放った。

「ブラストファイヤアアツ！！」

瞬間、紅炎の光が放たれ、先で立っている少年を飲み込まんと宙を駆け抜ける。

「—————」

ユーノが足元に翡翠色の魔法陣を顯し、両手を前に出しながら何

かを眩いた刹那、紅光が少年の前に顯れたシールドに衝突する。

周囲に轟音が響き渡り、爆発の煙によつて少年の姿が埋もれる。子供達は少女の魔法に興奮と驚きを示し、少年の安否を心配する。やがて煙が晴れると、そこには無傷の少年が立つていた。

オオーッ！と感嘆の声が子供達から上がる。

「お見事です。さすが師匠」

「・・・ねえシユテル。手加減してくれた？」

「八割で撃ちました」

「それ手加減なの！？」

「防いだではありませんか」

「かなりギリギリだったからね・・・」

疲れた様子でユーノは言つ。

スファイアプロテクションを掛け、前にラウンジシールドと防備を固めておいて良かつたと安堵しておぐ。まさか、半ば本氣とは誰も思つまい。

「とりあえず、これで良いかな」

「そうですね。ではもう一度」

「ごめん。もう一回言つて」

「もう一度」

「待つて、それだとまた繰り返すことになる気がするんだけど。何回やるつもり？」

「無論、師匠の防御を貫くまで」

「勘弁してください」

ユーノが綺麗な土下座を披露するも、結局繰り返す羽田になつてしまつた。

計三回となつた攻防だが、何だかんだで全て防ぎきつたユーノで

ある。その後、疲労で少しの間動けなかつたコーノだが、おかげで子供達からさらに親しまれる結果となつたのだから、良しとしておひい。

無事、魔法教室を終えた一人は、並んで帰路を歩いていた。

「お疲れ様です」

「疲れたのは殆どシユテルが原因だと思つんだけど」

「防御が堅い師匠が悪いのです」

「責任転嫁だよね、それ」

抗議するコーノの言葉をシユテルはサラリと流す。
意外と負けず嫌いな彼女である。

そんな風に今日の教室の事で話しあり反省をしていると、突然シユテルが話題を変えた。

「そういえば、一つお聞きしたい事があるのですが」

「なにかな?」

「貴方が庇つたという護衛・・・・ナノハですか?」

シユテルの言葉に立ち止まるコーノ。ポリポリと頬を搔いた。

「・・・何で分かつたの?」

「リーグさんの家で話していた時に、私は「護衛される人がする人を庇つてどうするんですか」と師匠に言いました。その時師匠はそれを理解している様子でした。にも関わらず庇つうとしたら、ナノハ辺りではないかと考えました」

「察しが良いね」

「お褒めにあずかり光栄です」

シユテルはスカートの両端を摘んでお辞儀をする。
しかし、ヒシユテルは言葉を続けた。

「不意の襲撃とは言え、ナノハが遅れを取るとは有り得なくはないといえど、考え難いのですが」「…………それはね」

止めた歩みを再開させ、前へと進みながらコーノは囁つ。

「僕も含めて、周りがなのはを止められなかつたからなんだ」「止める、とは？」

「なのは、出動要請されてないのに積極的に事件に協力したり、訓練を休む間を惜しんで行つたりしていたんだ。休むように言つても、なのはは笑つて「大丈夫」つて言つから、僕達も強く言えなくてね。その結果、襲撃された際になのはは反応出来なくて、死にかけた」「…………そういう事でしたか」

責任を感じていたのだろう。ヒシユテルは目の前の少年の心情を推測する。

なのはから聞いた話では、彼女が魔法を知るきっかけはコーノだと言つていた。

おそらく、魔法を知つたせいでその様な状況に遭遇してしまつた。等と考えているに違ひない。

付き合いはけつして長くはないが、彼がそういう人物だという事は理解しているつもりのシユテルである。

「ですが、それで貴方が死にかけ、その上行方不明になつては、なのはは責任を感じてしまうのではないでしょうか」

おそらく、あちらでは死亡した事になつてゐるのでは?といつし
ュテルの言葉に顔を青くするコーカ。

なのはの事だ、コーカと同等、いや現状を考えるとそれ以上に責
任を感じるに違ひない。

せめて、どうにか脱出して彼女に一言言葉を掛けていたら……
と今更後悔する。

そんなコーカを見て何か思つたのか、シユテルは彼の両手を自身
の手で包み込む様に握る。

そして彼の目を真つすぐ見詰めながら言つた。

「でしたら、なるべく早く帰還の方法を見つけて、ナノハを安心
させましょ!」

言葉と同時に、フツと微かに微笑みを乗せてくる。
コーカは一瞬シユテルのその表情に見惚れ、呆然としたが、同じ
様に微笑み返した。

「そうだね」

「その際には、私もついて行きます。ナノハと約束していきますか
ら」

「ははは、じゃあそのためにもなるべく早く方法を見つけないと
ね」

「はい」

その後、二人は別れ、それぞれ暮らす家へと帰つていいく。
この時二人は意識していなかつたが、「一緒になのはに会いに行
く」という約束を交わしたのだった。

第五話（後書き）

どうでしたか？

日時はこんな感じで書いて行きたいと思つています。

次はレビュイのハンターか、オリキャラのミーナかな？

ご指摘、質問等々はお気軽に、
では、次のお話で。

第六話（前書き）

初の一人称？です。

ただ、今回は今後絡ませていく予定のオリキャラ、ミーナ視点、
のようなもので。

本編というよりは幕間と言つた方があつていいかもしません。
では、どうぞ。

最近、私ことミーナ・エクレアには興味深い人がいる。

その人は女の子にも見える中性的な顔で、綺麗な金色の髪で、線が細くて華奢な、友人の少女達と同じく過去から来たという男の子。名前はユーノ・スクリニア。

現在は私の家で居候している。

私達が暮らすエルトリアにユーリ達が来てから六年。

彼女達が使う魔法は私達を、エルトリアの大地を木漏れ日の様な柔らかい温もりで癒している。

私達が彼女達から魔法を学ぶ様になったのは彼女達の好意が元でもある、私達の暮らしの為でもある、だけどそれよりも大きい要因は別にある。

それは、魔法で癒してくれた彼女達を今度は私達が魔法で癒したいという事。

彼女達がそういう事を特に望まないというのは理解している。別に魔法ではなく、別の事で恩返しするという選択肢がある事も分かっている。

確かにそういう考えも有りだ。

しかし、私達は、だからこそ魔法で返したいと思った。

だが私達魔法初心者よりも何段も上の彼女達に恩返し出来る日は遠い。

これは最早意地だ。

魔法で教えて貰った温かさを魔法で返したい。

私達はそんな思いを持って、彼女達から魔法を学んでいる。

少々話がズレてしまった。

本題に戻る。ユーノ・スクライアの事だ。

そもそも、私が彼に興味を持ったのは、彼が彼女達と同じく魔法が使って、しかも彼女達の内の一人であるシユテルが彼の事を師匠と呼んでいたからだ。

私達の恩人であり先生であり、目標でもあるシユテルが彼を師と呼ぶ。

私には衝撃的な事だった。

何日か彼を見ても、何故彼がシユテルにそう呼ばれているのか理解出来ない。

紅い炎の魔力を持つクールなシユテルと何処か抜けた感じがあるヘタレっぽい彼。

どうも、頭の中で上手く繋げられない。

先日開催された魔法教室で何かあったようだが、私はその時参加していなかったので何があったのか知らない。

興味という名の好奇心が抑えられなくて、私はシユテルに聞いてみることにした。

「私が師匠を師匠と呼ぶ理由ですか？」

「うん」

私に問い合わせられたシユテルは、何時もと変わらない無表情で少し考えるそぶりを見せる。

そして開かれた口から出てきたのは、

「それは、彼が私よりも優れた能力を持っているからです」

「…………ホントに？」

「はい。私は前から常々、彼から『教授頂きたいと考えています

素直に驚いた。

彼が彼女にそう言わせるほどの中の物を持つていると、失礼だけど思えなかつたから。

「・・・・・ 能力つて?」

「魔法演算能力、簡単に言えば魔法を発動する速さと、魔法を扱う技術の巧さです」

「?」

理解出来ないでいる私を察してくれたのか、シユテルはそのまま話を続けてくれた。

「彼の魔法の展開速度と技術には目を見張るものがあります。現に私は、結界魔導師である彼に一度敗れています」

「・・・・・ 結界魔導師?」

「護りに優れた魔導師の事です」

護りに優れた。

つまり攻撃で劣る彼にシユテルが敗れたという話だ。

それはともかく、確かシユテルは殲滅が得意だと前に言つていたはず。

話を聞く限り、彼とシユテルは戦う舞台といつものが違うと私は思う。

「・・・・・

「・・・他にも、理由はあるにはあります

私が黙り込んでいると、シユテルが何処かに視線を向ける。

私もそれを追いかけると、その先には子供達と楽しそうに戯れて

いる彼がいた。

「ナノハが言つていました。彼がいるだけで、心が落ち着くと、
背中を任せられると」

「・・・・・」

「私も、そのように言われる魔導師になりたいのです」

その言葉を最後に、シュテルは何も言わなかつた。

シュテルが言つた言葉。

普段、レビイ達から頼られているのとは何が違うのだろうか。
私にはまだ分からぬ。

シュテルの言つていた「ナノハ」とは、度々シュテルの話の中で
出てきていた魔導師の女の子だ。

シュテル曰く好敵手。

そんな少女に今まで言わせた少年・・・・・か。

どうやら、私が彼を理解するまでは、まだしばらくの時間が必要
なようだ。

第六話（後書き）

エルトリアの人々のシユテル達に対する思いとか、ミーナの現時点でのユーノへの印象とか。今日はその辺を。

ご指摘、質問はお気軽に。

次回は、リリカルハンターの予定です。

・・・・・今年もあと一日か、早いな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8232z/>

翡翠と少女達～遠く離れた世界で～

2011年12月30日23時49分発行